昭和三十年十二月
第二号

窯業同窓會會誌

東京工業大学
窯業同窓会

会員の皆様へ　会長　大野政吉
母校廿五年勤続に対する記念品拝受の御礼　山内俊吉
謝辞　河島千尋
欧州の瞥見　吉井豊藤丸
窯業卒業五十年会
窯業同窓会総会と講演会
窯業同窓会会務報告
蒸業同窓会事業寄附金
会員移動
奥田先生を悼む
京滋支部春の例会記

会員の皆様へ

会長　大野政吉

窯業同窓会も会員各位の熱心な御援助によつて段々と隆盛となりました。誠に同慶に耐えません。昭和三十年の同窓会総会を四月十六日東京工業大学で催しまして、その節所感を述べましたが、本会のように多数の会員が新旧、老若を問わずに和気あいあいと親睦している会は少ないことであります。この精神のあらわれとしまして本年は別掲のような温い数々の行事が行われました。これ等に対して会員各位には格別な御賛同をいただき、何れも盛況を得まして感謝しております。更に会員間の密接な連絡、懇親をはかるため昨年九月に第一回の会誌を発行したのでありますが、その後諸般の事情で年数回の発行予定がとだえまして今回第二号を御届けするはこびになりました。本年は名簿発行の年に当つておりませんので(二年毎に名簿発行)会員住所変更を附録しました。何卒会員動静の一部を御推察の上尚十分の御活用を願います。

今後本会は各種の行事計画を実施致したいと存じますが、これに対しまして会員各位の御意見をいただき度く思つております。又本会報に御動静を御寄せいただければ一層にぎにぎしく発展するものと考えられます。窯業同窓会はこのように年々発展の一途をたどつておりますが、これは会員各位、関係会社等の御寄附御援助によつて会計をまかなつております。この点厚く御礼を申上げますと同時に、今後共一層の御支援を御願い致します。なお又総会後の懇親会の恒例福引会には数々の御贈与品を賜りましたがこれも併せて御礼申上げます。会誌第二号発行に際しまして御挨拶申上げます。

母校廿五年勤続に対する記念品拝受の御礼

山内俊吉

大学を出まして本学講師として就任以来二十五年、蔵前を出まして三十一年実に早いものでございます。静かに目をとじますと蔵前生活を通じ関東大震災今回の戦禍と二回に亘る大災害を境とした三つの時代の変つた姿が次々と頭の中に浮びいろいろの思い出が湧き出て参ります。本学就職以来今日迄、私は私なりに最善をつくして参りました。しかし性来愚鈍のためにこれということも出来なかつたことは誠にざんきに堪えません。

その間私といたしましては母校にいて卒業生の皆さんが益々御発展になり、それにつれて学校も益々栄えてゆく姿をまのあたりみて、これが何よりの心の慰めでありました。

今日まで皆さんの並々ならぬ御協力、御支援に対しては常に感謝いたしているのでありますが、この凡々と二十五年余りの長い間御迷惑をかけてまいりました私に対し、本年春の同窓会のよき日に大野会長を通じ御鄭重な祝辞を頂戴いたしましたことさえ何となく面ばゆい感じがしたのでありますのに、その上全く思いもよらぬ皆さまの心からなる、記念品までくださいます御心情は本当に身にしみてありがたく全く感激いたしている次第であります。

御恵与の絵画は末永く拙宅応接室に掲げ記念といたす所存でございます。茲に御芳情に対し哀

心から御礼を申し上げます。今後も駑馬にむちうち努力いたしますから、足らない点は今迄同様よろしく御教導御支援下さいます様御願いいたします。

最後に皆様の御健康と御幸福とを祈り併せて母校のいやさかえを祈念いたします。

感謝の気持は言葉に尽せませんのでここに蕪辞をもちまして心からなる御礼のしるしといたす次第でございます。

謝辞

河嶋千尋

先般、窯業同窓会より永年勤続に対して、立派な洋画の御贈呈を受けましたが誠に得難いよき記念として自宅応接間に掲げ、大野政吉会長の並々ならぬ御配慮とともに先輩諸氏、卒業生各位の御厚情を心から感謝申上げております。

惟えば昭和四年、蔵前の昇格による大学創設とともに本学に赴任して以来、すでに満二十六年の永き歳月を経ましたがその間、故近藤清治博士の温情の下に、また先生亡きあとは山内教授を始めとし窯業関係の職員諸氏、研究室員一同の厚い庇護を受けましたが徒らに無為、無能にして今日に到りましたことは誠に慚愧に堪えません。

今や、わが国情も敗戦という大きな躓きを契機とし全く一転して、険しい様相を呈して参りましたがわが窯業においてもこの二十年間に亘って、珪酸塩工学から更に学問的領域は拡大せられ、地質鉱物、金属工学、冶金学、電熱化学などの分野と緊密な関連を保ちつつ、今日の酸化物および金属窯業品など超高温材料としての非珪酸塩工学の新分野の開拓に到るまで多くの変遷と発展の一途を辿って参りました。しかし新しい学問の進歩は最早や個人の力でなく、組織の力によらねばならぬ現在においては本学窯業研究所の強力な組織の下にあって若き学徒によって今後さらに一層の発展を遂げ、輝かしい研究業績が打樹てられんことを心から期待して止みません。

わが歩み来りし二十数年の過去を顧み、また来るべき次の世代を荷う若き人々のことなどに想いを馳せるとき、今更乍ら“歴史は繰り返す”(History repeats itself)の言が強くわが胸に迫るを覚えます。

茲に謝辞を述べんとして甚だ意を尽せぬものがありますが紙上を借りて一言御礼の御挨拶を申上る次第で御ざいます。

欧州の瞥見

秩父セメント株式会社　吉井　豊藤丸

今から三十年程前、私は文部省の文化視察学生の一員として、一夏支那を遍歴したことがある。その時は今の山内教授及紡績科の猪越氏とも一緒で、実に愉快な旅を続けたことが今に忘れられない。

出かける前、約半月程、私は上野の図書館に通つて、支那に関する本を片つぱしから読破し、一応の支那通という自信をもつて出掛けた為実に旅行が能率的であつた。

然るに今回の欧州行は、渡航審議に数ケ月を要し、出掛ける間際迄、果して外貨の割当が受けられるかどうか、全々見込が立たず、従つて事前に欧州に関する調査も勉強も出来ないままに、いきなり飛行機に乗つた為全く当惑した。それで順序はあと先になつたが、欧州各国で出来るだけ本や写真や絵ハガキを買い集め、後で之を読む計画を立てたが、未だ其半分も読みこなせないので、この目にうつり、心に感じたことを二、三のべて御免を蒙ることにする。

日本の今日直面して居る重大問題の一つに輸出の不振がある。

然らば、其原因はいずづこに存するかというに製品の原価が高い為である。では何故高いか。一例をセメントにとつて見るが、程度の差こそあれ他の品物も略同様と見て差支ない。

日本のセメントの高い理由

一、燃料(石炭)が高い。
二、電力が高い。
三、労働力の原単位(man hr/t)が高い。
四、一般に従業員の科学技術水準が低い。
五、日本は資本が少くて金利が高い。
六、工場設備は一見日本も欧州も同じ様な機械が据付けてあるが、日本の機械は材質がわるい上に据付や附属設備に於て不備な点が見受けられる。

炭価の高くつくのは、我国の炭層がうすく採掘能率のわるい為等によるもので、今回政府は竪坑の開鑿を奨励し、石炭界も之に力を入れて居る様だからこれに期待をかけたい。

日本の水力資源は米ソに次いで豊富であるからその急速なる開発に期待するものであるが、日本の金利の高いこと、ダム地帯の立退料等の保障が法外に高いことは一考を要する。

つぎに労働効率即ちMan hr/tの高いのは、四つの島に、八八〇〇万人という日本満員による必然の結果かも知れないが、工場としてはあく迄必要人員だけの雇傭にとどめ、失業者は社会保障に

よつて救済することにしなければ、いつ迄たつても悪循還は立切れないからMan hr/t は下らず勢い製品の原価は低下しない。

次に日本の工場従業員の科学技術水準の低いことに就て一言したい。それは筆者が滞欧中に、日曜のルーブル博物館に行き入場無料に戸惑をして笑われたが、ロンドンの大英博物館や科学博物館などは年中無料であるのには驚いた。特に日曜ともなれば若い夫婦が幼い子供の手を引いて陳列された古人の偉業の蹟―例えばニュートンの万有引力の発見、ガリレオの振子、スチブンソンの汽車、ワットの蒸気汽缶、デービーやブンゼンの安全灯等々―を子供に指さし乍ら不知不識の間に子弟に科学、技術教育を施して居るのを見て実に羨ましく感じた。

アインシュタインも後年かの相対性原理を発見したもとは、五歳の時、父親から初めて見せられた羅針盤の魔力が彼の幼い脳裡に強く焼つけられた為だと言う。

国民の科学技術水準の高まらない限り、原価の引下げも、輸出の振興も望まれない。それにつけても博物館の入場料位は日本でも年中無料にしてほしいものである。

窯業卒業五十年会

明治三十八年に窯業科を卒業された高井三郎、藤岡幸二の両氏が卒業五十年になるので高井、大野両氏の計画でその前後に卒業された方々へ呼びかけ恩師の墓参と懇談会が催された。

五月二十一日(土)午前十時に雑司ヶ谷墓地のしのぶ屋へ集合し先ず元工業試験所長と窯業科長であられた工博高山甚太郎先生の墓に参拝し、次で数日前に墓所の修理が出来た元東京工業試験所第三部長で窯業科の講師をしておられた工博北村彌一郎先生(三十回忌に当る)墓前に読経後一同参拝した。(北村先生奥様の甥に当る工大の向正夫助教授も参列さる)後旭硝子の御厚意による車で谷中墓地に赴き元窯業科長であられた平野耕輔先生の墓参をすませ正午頃旭硝子の麻布寮におちつく。ここは旭硝子ＫＫの倉田常務の御厚意により準備して頂いたものである。

窯業卒業五十年会
昭和三十年五月廿一日 於旭硝子狸穴寮

前列右より
藤岡幸二
永塚楽治
笹井熊之助
高井三郎
後列右より
森谷太郎
大野政吉
堅田欽次
倉田元治
宮川愛太郎
田賀井秀夫

出席された方は笹井熊之助氏(明治三十七年卒)高井三郎氏と藤岡幸二氏(明治三十八年卒)大野政吉氏(明治三十九年卒)堅田欽次氏と永塚楽治氏(明治四十年卒)で他の方々は健康や遠地等の関係で御参加出来なかつた。工大からは山内、河嶋両教授が参加すべき所文部省科研費配分等の重要会議で出られない為森谷教授と田賀井助教授及宮川が参加し懇親会には倉田元治氏が御見えになつて何かと御配慮をして下さつた。

先ず高井氏からこの会合を実施した経過を述べた後一同起立し物故教官及同窓の御冥福を祈る黙禱を捧げてから、御互の健在を祝福して乾杯する。開宴中意見を交換した結果今後毎年窯業科卒業五十年の同窓を中心にして集まり若き日の思い出を語り合うこととし、一応この会を「窯業五十年会」と呼ぶことにした。尚当時の教官で御存命の板谷波山先生へ感謝のよせ書をする。

支那料理に杯を重ねる程に七十歳余の皆さんが蔵前での若い頃を元気に語り合い乍ら唄も出るなど実に楽しそうである。

次で別席で銀座のよしのずし親方がいきのよいいろいろのたねを前に列べ腕のいい所でにぎつて出す江戸前の寿司を談笑し乍らつい満腹する迄手が出る。最後の別席で又にぎやかに語り合い四時頃散会した。窯業界につくされた皆様の御功績に感謝し益々御健在ならんことを御祈りします。尚この会合の各所で森谷教授が記念の写真をとつて下さつた。(宮川 記)

○窯業卒業五十年会出席者が恩師板谷先生に感謝の寄書を御送りした御返事が大野会長によせられたので記させて頂く

拝啓 倍々御清祥御消光御慶び申し上げます。
此度は御懐しき皆様より心籠りの御手紙を戴き御懇情銘肝拝読いたしました。
蔵前時代の事共夫れから夫れと回想いたし感慨限りなく眠りにも就かず夜を過しました。

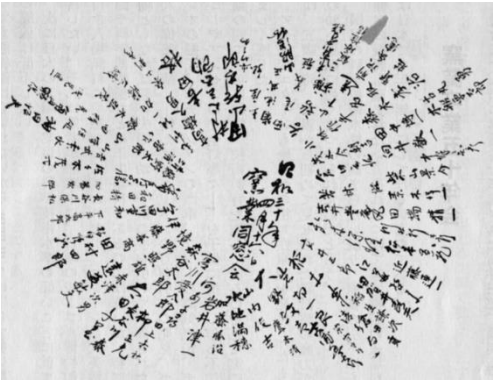
老生今年八十四歳になります。一昨秋気管支炎や肺炎に罹り続いて臥療いたし居りますが、此頃段々宜しき方に向い医師も七、八月頃までには払床出来得ると申され折角静養いたして居ります。
平素は至極元気なのですから拙宅近傍御通過の節には是非御来遊下され度百出の旧談を楽しみに御待ちいたしております。
尚季節不順の折柄皆様並びに各御家庭の御健勝を切に御祈り申し上げます。 匆々敬具

窯業同窓会総会と講演会

四月十六日(土)午後一時半から母校の東京工業大学第一会議室で開催した(進行係宮川愛太郎)。

一、会長挨拶　大野政吉氏
二、会務報告　田賀井常任幹事より昭和二十九年度の収支決算及業務報告あり
　　(別記)　承認
三、山内河島両教授の母校勤続二十五年祝詞　大野会長
四、同　　記念品贈呈　　同
五、会員和田精氏、浜田庄司氏、伊藤亮氏、稲村泰氏の受賞に対する祝詞及清浦雷作助教授の教授昇任と池ノ上典氏の工学博士学位受与に対する御祝いの言葉　大野会長

昭和三十年四月十六日開催の窯業同窓会懇親パーテイにおける大野会長の御挨拶



窯業同窓会懇親会席上における寄せ書

同上総会席上における山内教授への記念品贈呈

同上総会席上における河島教授への記念品贈呈

講演　秩父セメントKK　吉井豊藤丸氏（約五十分）
本学教授　森谷太郎氏（約一時間四十分）
閉会の辞（母校の近況も述べる）　山内副会長

○懇親会 午後五時半頃から本学々生食堂で行った。大野会長の挨拶後ビールの乾杯に始まるカクテルパーテイの形式をとつた。

この席ではテーブルスピーチはないが百名近い老若同志が各所で歓談するさまは如何にも楽しそうであつた。やがて別記の様な寄贈の景品で恒例の福引に一層興を添えて歓をつくし万歳三唱後盛会裡に散会した。

窯業同窓会々務報告　昭和三十年四月

一、庶務報告

① 幹事会開催　昭和二十九年六月
於蔵前工業会館
協議事項
（イ）新旧常任幹事々務引継ぎの件
（ロ）新たに副会長三名を選出することにして　江副孫右衛門、浮洲武彦、久保季吉の三氏を薦選した。
（ハ）会誌の発行を決議した。
（ニ）二十八年度名簿を改正して、二十九年度名簿の発行を行うこと。

② 昭和二十九年十一月に昭和三十年度会員名簿を発行した。

③ 常任幹事会開催　昭和三十年一月十五日
於旭硝子株式会社
常任幹事会　宮川愛太郎氏へ記念品贈呈
協議事項
（イ）昭和三十年度総会を四月十六日母校で開催すること。
（ロ）山内、河嶋両教授勤続二十五年記念祝賀を行う。
（ハ）事業資金不足につき、寄付懇請方協議

④ 学内幹事会開催　昭和三十年二月十日
於窯業研究所
（イ）四月十六日開催の三十年度総会について協議す。
（ロ）山内、河嶋両教授の勤続二十五年記念品贈呈について、その募金要項を協議す。

⑤ 常任幹事会開催（四月十二日、十五日）
四月十六日開催の昭和三十年度総会の準備につき協議す。

二、会計報告

窯業同窓会収支決算報告書
（自昭和二十九年四月一日
至昭和三十年三月卅一日）

収入の部
収入総額　一八三、八七〇円
内訳　前年度繰越金　六、五七六円
預金利子　三一六
事業寄付金（一二一名）四五、九七八
懇親会々費　四一、〇〇〇
名簿広告料　九〇、〇〇〇

支出の部
支出総額　一七四、三二九円
内訳　通信費　一六、二八〇
会報印刷代（二回）　一六、七〇〇
懇親会費（九六名）　三七、二七五
同右写真代　一、四六〇
名簿印刷費　八二、七八〇
名簿発行諸費　一三、七二〇
宮川愛太郎氏還暦祝チョツキ代　一、二七八
会議費　三、八六三
雑支出　九七三

差引残額　九、五四一円
内訳　預金　三七六
振替貯金　二、三六五
現金　六、八〇〇

宮川愛太郎氏還暦並に勤続四十年記念祝募金収支決算報告書
（自昭和二十九年四月一日、
至三十年三月卅一日）

収入の部
収入総額　八三、五〇〇円
（一口一〇〇円　計二二七名　八三五口）
内訳　二十口　六名、　十口　十九名
七口　一名、　五口　四十七名
三口　三十八名、二口　五十三名
一口　六十三名

支出の部
支出総額　三、八五〇円
内訳　趣旨通信費　三、五〇〇円
礼状通信費　三五〇

差引贈呈額　七九、六五〇円

懇親会に於ける福引景品御寄贈者芳名
柱　鏡　二〇ケ

旭硝子株式会社（倉田元治様）
ドライケミカル消火器二ケ　同
火けし筒　二〇ケ　同
硝子コップ　一〇打
石塚硝子株式会社（石塚正信様）
洗濯器（硝子）　三ケ
大日本硝子工業ＫＫ（北川信吉様）
電球（テラスランプ）五〇ケ
日本電子硝子ＫＫ（村上三五朗様）
楕円洋皿（一二吋）　一ケ
日硬陶業ＫＫ（上山節様）
取　皿（五吋）　五ケ　同
硝子菓子皿　一〇ケ
各務クリスタル製作所（各務鉱三様）
灰　皿　一二ケ
大倉陶園（水地満穂様）
メヌマポマード　六ケ
名取硝子ＫＫ（名取賢荘様）
灰　皿　五ケ
東洋陶器ＫＫ（江副孫右衛門様）
花　瓶　一ケ
浜田庄司様
大　皿　一ケ　同
琺瑯バット　五ケ
角田顕保様
灰　皿　二〇ケ
佐々木硝子ＫＫ（田端精一様）
灰　皿　一〇ケ
升水政幸様
タオル
飯塚惟信様
ブローニーフイルム　五ケ
前沢秀憲様
花　瓶　二ケ
島岡達三様
大　皿　四ケ　同
火　鉢（尺二寸）　一ケ
信楽窯業試験場（中野義雄様）

景品代として御寄附頂いた方々の分は、事業寄附金へ繰入れてありますので御了承願います。
尚日本硝子株式会社殿より華房、山田、吉武氏の御尽力によりビール二打が懇親会へ寄附された。

山内、河島両教授勤続二十五年祝賀記念品寄附者芳名録（略敬称）

二、〇〇〇円　窯業同窓会
一、〇〇〇円　加藤左織　稲村　泰　深田　義
水野茂樹　田中博一　福井　哲　伊藤正三
森谷太郎　井上英吉　岩崎郁夫　村松庄治
清浦雷作　吉井豊藤丸　磯部純一　真保義郎
茂木今朝吉　高井三郎　田山幹太郎　浜田庄司
島岡達三　木下末太郎　横瀬信次
八〇〇円　油田恒夫
六〇〇円　大原　功
五〇〇円　中村周清　西尾義雅　草間　保
丸山礼三　藤井　稔　中村義夫　奥川恭平
足立保彦　藤井豊男　山田久夫　川久保正一郎
素木洋一　稲生謙次　吉田　博　岩井津一
宮川愛太郎　三浦正二　中村三千夫
田賀井秀夫　対島英二　吉田　格　倉田　貢
島　珪次　楠井堅三　遠藤隆雄　赤沢次男
佐々木茂弐　永楽秀光　山田精吾　清水　尚
山脇滋樹　笹沼宗一郎　田上嘉秋　鵜野太
郎　桑原直輝　西田一雄　宇野達路　遠藤敏
夫　岩切一良　尾野勇雄　江藤哲夫
山室忠臣　北村友太郎　池ノ上　典
四〇〇円　小林三雄　杉浦正敏　松本秀夫
三〇〇円　開田丈夫　竹沢義郎　内田　穣
奥田　進　加川　勲　蒲田慎悟　美崎敬之
伊藤国彦　吉武素水　丸茂博正　上野三郎
藤井重信　桝本　賜　河井信雄　島村弘之
土屋　弘　加藤勝治　伊藤正臣　片瀬伝治
二〇〇円　笠原　理　岩瀬　滋　内藤降三
毛利良椎　中村能人　黒田永二　浅見進一
福井　博　張鴻烈　前田芳淳　吉野成雄
大河原普　境野照雄　鈴木弘茂　近藤連一
太田千里　杉浦孝三　宇田川重和　大場立夫
岡田久子　湊　よき　松本三則　影山静夫
山本準之助　斎藤進六　村田順弘　毛利　純
伊藤善高　青島清二　佐多敏之　加藤竹蔵
長谷川泰　松下　亘　藤岡　了　渡辺一之
田中広吉　浅田敬徳　山崎俊雄　鷹木　清
渡辺宗男　浜野健也　福浦雄飛　各務芳樹
佐々木元一　荒川正治　新居善三郎　奥田博
磯村昌弘　芝原雅彌　梅田夏雄　竹内　稔
岡野郁郎　飯塚常太郎　浅野正和　武田雄二
名取賢荘　田端精一　向井敬一　森本孝治
遠藤幸雄　長谷川保和　加藤欽一郎　山下透
秋山方宏　飯塚惟信　小島　宏　関口　淳
田村忠臣　今村敏行　藤本章一郎
一五〇円　中　俊
一〇〇円　福崎福七　大矢真吾　岡田靖郎
浅井弘恵　亀井四郎　五十嵐才吉　中村恵一
宗宮重行　山内　晃　田村四郎　吉永善子
瀬高信雄　上西義介　武久松代　柴本房子
柴山景介　黒田泰弘　下平高次郎　伏野勅明
井上　昭　山本博孝　中村紀夫　藤井　透
田代熊楠　新村年康　前沢秀憲　菊地武正
中沢三知彦　大槻彰一　伊藤豊成　吉村満雄
塩田政利　菅沼武彦　島　珪次　日笠泰行
御代健次郎　福田靖子

寄附金合計　金七万弐千百五拾円也（百九十九名）

支　出

七五〇円　領収証郵送用五円切手
七〇、〇〇〇円　記念品（萩谷巌氏画洋画額二枚）
一、四〇〇円　額附属品代

記念品は五月二日に大野窯業同窓会会長と森谷世話人代表から山内、河島両教授に贈呈された。

以上報告します。有難う御座いました。

世話人代表　森　谷　太　郎
寄附扱者　宮　川　愛　太　郎

窯業同窓会事業寄附金

昭和二十九年度　寄附者芳名（略敬称順不同）

一、金参千円也　宮川愛太郎
一、金弐千弐百七拾八円也　大野政吉
一、金弐千円也　北村喜太郎
富士窯業株式会社　阪本工業所
一、金壱千五百円也　米谷忠次郎
光陽研磨材株式会社
一、金壱千四百円也　福井　哲
一、金壱千円也　山内俊吉　伊藤　亮　村上三五朗
河嶋千尋　井上英吉　鈴木保雄
一、金六百円也　井深捨吉
一、金五百円也　後藤一夫　尾関　稲　各務鉱三
原田親信　飯塚誠厚　伊奈辰次郎　清浦雷作
遠藤隆雄　楠井堅三　加藤左織　末野悌六
倉田　貢　森谷太郎　木船要太郎　若林明
桑原直輝　越前谷民雄　渡辺綱一
一、金四百円也　金島茂太　小島　宏
一、金参百円也　浮洲武彦　横瀬信次　松本昌蔵
笹井熊之助　榎本修二　斎藤久明　素木洋一
山田久夫　川久保正一郎　吉田　博　稲生謙次
田賀井秀夫　川口敏夫　島岡達三　内藤繁生
茂木今朝吉
一、金弐百円也　浅田敬徳　池田卯一　稲村　泰
大城敦之　大木通胤　加藤勝治　高田利彦
遠藤幸雄　佐野川建　木地一郎　阿部正良
江藤哲夫　寺門常次　中村藤一郎　佐沢光夫
高井三郎　境野照雄　大河原晋　毛利純一
田中広吉　小林作平　中野義雄　森本孝治
田村忠臣　石川久羅四郎　田上嘉秋
中沢三知彦　堅田尚　久富豊実　川村久爾彦
一、金壱百円也　山崎俊雄　柴田周逸　勝田恵一
諸伏辰男　竹内　稔　寺井昭治　加藤竹蔵
柳　正光　赤尾洋二　大牟礼勝　長谷川泰
杉浦孝三　宇田川重和　湊　よき　佐多敏之
瀬高信雄　村田順弘　大谷典生　名取賢荘
柴山景可　田端精一　高橋久男　内藤義一
鈴木弘茂　伊藤善高　吉田　格　長谷川保和
太田千里　島田信雄　近藤連一　青島清二
以上合計　壱百拾弐名
総額　四万五千九百七拾八円也

昭和三十年度　寄附者芳名

一、金五千円也　日本碍子株式会社
一、金弐千円也　倉田元治
日本特殊陶業株式会社　浮洲武彦
山内俊吉　河嶋千尋　久保季吉
一、金壱千八百円也　窯業卒業五十年会（笹井、高井、藤岡、大野、堅田、永塚）
一、金壱千円也　北村喜太郎　井上英吉
田上嘉秋　森谷太郎　大野政吉　村上三五朗
木船要太郎　北川信吉　松崎錠三　佐藤素一
一、金五百円也　福井　哲　鈴木保雄　倉田　貢
真保義郎　笹沼宗一郎　佐藤　実
一、金参百円也　松本昌蔵　西田一雄　宇野遠路
遠藤敏夫　岩切一良　尾野勇雄　江藤哲夫
山室忠臣
一、金弐百円也　小島　宏　田中博一　吉田　格
田上嘉秋　関口　淳　田村忠臣
一、金壱百円也　浅見進一　名取賢荘　柴山景介
向井敬一　遠藤幸雄　鷹木　清　長谷川保和
伊藤善高　清水　尚　前沢秀憲　菊地武正
加藤勝治　伊藤豊成　吉村満雄　塩田政利
菅沼武彦　島　珪次　中村能人　日笠泰行
御代健次郎
以上六十三名　参万七千四百円也

会　員　移　動

今年末は名簿を発行しませんので御住所、勤務先等の移動其他御通知を頂いたもの及当方で調べた訂正事項を左に纏めましたので、三十年度用名簿の広告欄えでもはりつけて下さい。

尚三十年度用名簿中に訂正すべき個所がありましたら、御知らせ願います。（宮川）

●死亡の御通知をうけ又は判明した方々御生存中窯業界に残された御功績に感謝し御冥福を御祈りします。

安武　亀太郎（明二六）　安田　乙吉（明三一）
綾部　繁（明三八）　須藤　五郎吉（明三九）
青木　英三（大七）　鬼沢　武石（大九）
馬象　図（大一三）　大宅　昇（昭六）
杉山　隆（専）　奥田　誠一（元教官）

●勤務先又は住所変更其他の訂正
［省略］

●窯業関係職員中住所変更
［省略］

●窯業関係職員へ左記を追加する
［省略］

●元窯業関係教官中訂正
［省略］

近藤清治博士記念会編纂
窯 業 の 研 究（Ⅰ）
★本書は日本窯業学界の権威者故近藤清治博士の業績を記念し、我国斯界の第一人者が旧師の追悼と遺業の顕彰を兼ねて各専門分野の研究発展の大勢を概観した論文集である。
★内容は窯業一般・原料・陶磁器・耐火物・セメント・ガラス・研削材等の全般を網羅し、内外の諸文献を豊富に引用しながら解説されたもので、窯業研究者には座右必携の好者である。敢えて窯業同窓会の会員各位に御購読をお勧め申上げる。
B五判上製布装 二三〇頁 **定価四百円**
お申込みは東京都目黒区大岡山東工大窯業研究所宮川宛、又は 東京都港区赤坂溜池五 株式会社技報堂宛に願います。

奥田先生を悼む

山内俊吉

本学元窯業学科講師奥田誠一先生は久しく神経痛になやまされ御気の毒に存じましたが御養生御看護の甲斐もなく去る十月二十七日七十二歳をもつて他界遊ばされました。誠に哀悼の極みでございます。

先生は三重県津市の御出身で故近藤清治先生とは中学時代からの親しい友達の御一人であつた様であります。

明治四十三年東大心理学科御卒業後、心理学教室および文学部美術史研究室で研究をつゞけられ大正十年特許局技師兼農商務技師となり、後意匠商標部長となり約二十五年の久しきに亙りその敏腕をふるわれました。その間、御物委員会、国宝保存委員会等の委員を仰せつけられ、その他公私の色々の要職につかれ御退官後も我国美術工芸の発達に非常に貢献され、特に古陶器の鑑賞に関しては我国最高の権威者であり帝室博物館でもその面の担当官として各方面を指導啓発してこられました。

故平野耕輔先生の記念事業としての出版「日本の陶磁」は先生が病を押して精魂を打ちこまれたもので、その強い責任感に我々は常にはらはらして、この仕事を御願いして悪かつたと思つたことは一再ではなかつた。しかしこの仕事は他の人では出来ませんので御力にすがつた次第でした。今更の様に申訳ないことをしたと思います。その御完成に対し何等酬ゆるところはなかつたのでしたが出来上つた本を心から嬉しそうに見ておられた先生の御顔が今もはつきりとまぶたに浮びます。

先生はやせ形の軽快な姿をしておられました。そして和やかな、いつもニコニコした態度でのユーモラスな御話は人々を強く引きつけたものでした。このよい先生に接することが出来なくなつたのは実に残念であります。

茲に心から哀悼の意を表し御冥福を御祈り申します。

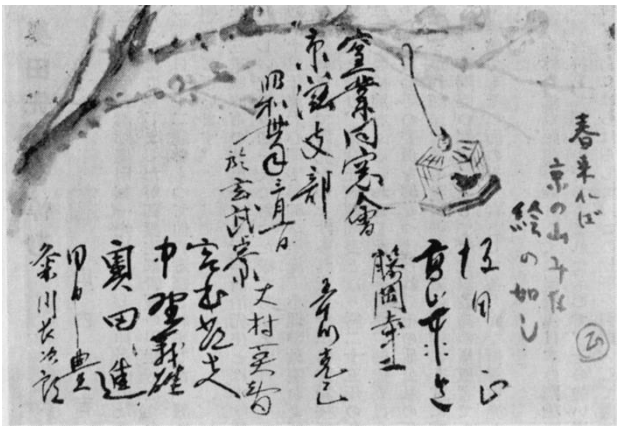
京滋支部春の例会記

桜も漸くチラホラの京の春宵、平安神宮に程近い玄武寮に会す。

先ず先日国際洗剤会議日本代表として出席世界一周の後帰朝された染の同窓第一工業製薬社長田中豊氏の土産話を聞く。親しく撮影されたカラースライドを中心として、世界各国の産業、芸術、政治、社会など有意義な又楽しいものであり、特に数十点の各国にて集められた 陶磁器の現品やセーブルの優秀品のカラースライドなど全国大会にでも話して頂いたらと思う程参考になるものだつた。

終つて講師の田中豊氏、蔵前工業会元老宮本常夫氏の特別出席を得て親睦の一献、和気満堂、酒は酒仙藤岡氏吟味の銘酒松竹梅、料理は田中社長御声掛の玄武料理とて心行くまゝに観を尽し洵に春宵一刻価千金であつた。

出席者 宮本常夫、田中豊、藤岡幸二、大村関智、粂川長次郎、中野義雄、五十川克巳、高山泰造、奥田進、坂田正（坂田記）



学位授与

茂木今朝吉氏(昭七)
「マグネシアクリンカーに関する研究」について永年の研究が結実されて目出度く工学博士の学位を授与された。

野口長次氏(昭五)
「スピネルの研究」の研究成果について芽出度く学位を授与された。

御両氏に対し同窓会一同御祝詞申上げると同時に今後の御精励を御願いします。

藍授褒賞授与

江副孫右衛門氏(明四二年)
永年にわたる業界に対する功績を賞され藍綬褒章が授与された。

同窓会一同も氏の御栄誉に対し御祝詞を申上げ愈々御清栄の程を御慶びしております。

編集後記

師走の声を聞き、なんとなくあわただしさをおぼえる頃、第二号をおとどけ出来るはこびとなりました。はやく手配をしてとは思つていましたが、どうもなまけていて申訳なく思います。今度の編集に当つて窯業同窓会は心あたたまる事業を毎年行つて、その御報告を各位にお届けする役目をこの編集氏がまとめいるとうことを感じ、普通の漫筆を書いては何だか済まないと思いました。けれども会計幹事に聞きますと会計内容が貧弱で、第二号を出すと次の第三号を出すお金の当がないと云つてます。そうなりますとやはり先立つものは何とやらで 会員各位の御寄附を向ふあわせで待つより外はないというもので、何卒振つて御拠金の程を相願うことになります。一口百円、何口でもよく、現金同封御送り下さい。

今年から卒業五十年の先輩諸氏の会合も始まりました。機械の方の白星会では卒業五十年の方々に記念品(大倉陶園製、蔵前母校の図を画いた扁額)を差上げたそうですが、窯業同窓会でも何とかこんなこともしてみたらどうかとも思いますし、その他、永年窯業の廊下のお掃除をやつて、いつも会員の来学を笑顔で迎えている「おばさん」こと湊よきさんは明年還暦を迎えると同時に勤続三十年になる由、いささかお祝ひをしたいと考えております。

このような、窯業同窓会親睦の一つの表れ方がなごやかに会員のつながりの糸を引き、いつまでも善意の風習といつたものが続きそうです。陽春四月に総会も予定され、また一層の盛会となることと思いますが、どうも東京ばかりで総会を開いては地方会員に申訳ないので今度はどこか別の地方で行つたらどうかと思います。 (田賀井)

昭和三十年十二月二十日 印刷
昭和三十年十二月二十五日 発行
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学窯業研究所内
編集兼発行人 田賀井秀夫
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大学窯業研究所内
発行所 窯業同窓会
振替東京一九六八五五番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂
印刷者 大沼正吉